The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	和歌山市方言における疑問詞疑問文の文末詞「ナ」
Author(s)	山口, 華奈
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2013, 11, p. 57-65
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/24758
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大社会言語学研究ノート』第 11 号（2013 年 3 月）57-65

和歌山市方言における疑問詞疑問文の文末詞「ナ」

山口　華奈

【キーワード】和歌山市方言、疑問詞疑問文、ナ

【要旨】

本稿は、和歌山市方言における文末詞「ナ」のうち、疑問詞疑問文に用いられる「ナ」を取り上げ、その意味・用法について記述を試みるものである。この文末詞「ナ」の特徴は、以下のようにまとめられる。

（a）文末詞「ナ」は、疑問詞疑問文において、準体助詞を含め、名詞相当の句や節に後接して用いられる。

（b）文末詞「ナ」は、疑問詞疑問文において、話し手が、自らが判断できない不明な情報に遭遇し、自身の中でもそれに関して思案しながら、その「疑い」の意を表出する文末詞である。

（c）文末詞「ナ」は、疑問詞疑問文において、独話的な場面では問いかけ性をもたないが、対話的な場面では、語用論的な条件によって問いかけ性をもつようになる。

1.　はじめに

和歌山県和歌山市で話されていることば（以下、和歌山市方言とする）において、疑問文に文末詞として「ナ」[1]が用いられることがある。この「ナ」は、以下の（1）（2）のような疑問詞疑問文に用いることができるのに対し、（3）のような疑問詞のない真偽疑問文には用いることができない[2]。

（1）何の音ナ。（何の音だ？）

（2）誰と遊びに行くンナ。（誰と遊びに行くんだ？）

（3）*同じクラスの子と遊びに行くンナ。（同じクラスの子と遊びに行くのか？）

本稿は、このような和歌山市方言における疑問詞疑問文に用いられる文末詞「ナ」について、その意味・用法を記述することを目的とする。以下、2 節で先行研究と問題のありか、3 節で疑問詞疑問文における文末詞「ナ」の形式的・意味的特徴、4 節で「ナ」と他の文末詞との比較、5 節でまとめと今後の課題について述べる。

1）「ナー」と長音化することも多いが、本稿では「ナ」に統一して表すこととする。

2）和歌山市方言では、文末詞「ナ」は多様な文において用いられている。例えば、（3）と同じ形式をもって、「同じクラスの子と遊びに行くのよね。」と聞き手の行為に関する同意要求を表す文として用いることができる。本稿では、そのような用例は除き、考察の対象を、疑問詞疑問文に用いられる「ナ」に限ることとする。

また、本稿における用例は、主に筆者[3]の内省によるものである。用例は、先行研究からの引用を除き、文末詞と述部における方言形をカタカナで示し、他の部分は標準語で記す。「*」は、その文が文法的に不適格であることを示し、「#」は運用的に不適切であることを示す。

2. 先行研究と問題のありか

2.1. 先行研究

疑問詞疑問文に用いられる文末詞「ナ」は、先行研究において、文末詞「ナ」のうちの一用法として扱われることが多く、話し手の疑問を表し、それを聞き手に対して問いかける機能があると考えられている。

まずは、和歌山県の方言の、疑問詞疑問文における文末詞「ナ」に関する研究を見る。この「ナ」に関して、和歌山県で用いられている文末詞について述べた村内（1953）に記述がある。村内（1953）は「疑問」と「質問」を区別して扱っており、文末詞「ナ」の用法の一つとして、「質問」ではなく「疑問」を表すことが示されている。

（4）テキラ　ナニ　シヤンナ。（あいつらは何をしているのか。）

（5）テキラ　ナニ　シヨンナ。（同）　（村内 1953）

「ナ」に文末詞「ラ」がついた「ナラ[4]」や、その訛ったものとされる「ナン」も「疑問」の文末詞として挙げられており、「親愛の気持をこめて相手に問いかけるもの」と述べられている。

（6）アレ　ダン　ナラ。（あれは誰かね。）

（7）コレ　ナン　ナン。（これは何かね。）　（村内 1953）

次に、和歌山県以外の地域の方言の、疑問詞疑問文における文末詞「ナ」に関する研究を見ていく。和歌山県以外の地域でも広く、疑問詞疑問文に「ナ」が用いられている。

和歌山市のすぐ北に位置する大阪府泉南郡岬町にも、文末詞「ナ」と同様の表現がある。佐藤（1972）では、この用法を「たしかめ」と呼び、「ナ」は問いの文を作る必須の要素ではなく、「問いの文にあらわれて、相手にたしかめるはたらきをする」としている。

（8）ドコイキャ　ナ。（どこへお出かけかね。）　（佐藤 1972）

和歌山県に地理的に近い四国地方でも、高知県安芸郡東洋町方言（加藤 1966）や、徳島県方言（宮城 1956）において、疑問詞疑問文に文末詞「ナ」が用いられているようである。

（9）ダレガ　ホンナコト　ユータンナ。（誰がそんなこと言ったのだ。）

（10）コンナカニ　ナニガ　アルンナ。（この中に何があるのだ。）　（加藤 1966）

加藤（1966）によると、この「ナ」には「前に疑問詞が来る場合に、その疑問文を完結させる働き」が見られ、このような「ナ」の用法は主として男子が用いるとされている。

近畿西部においても、兵庫県播磨・但馬地域の文末詞「ナ」について記述した神部（2002）がある。疑問詞疑問文における文末詞「ナ」は、「問尋の表現を支える『ナ』」として取り上げられている。

3）　和歌山県和歌山市在住（0-21）。外住歴なし。

4）　現在の和歌山市方言では複合形「ナラ」は「ナン」に比べてあまり使われていない。

（11）ダイコン　ナンボー　ナ。（大根はいくらかね。）

（12）ナンデー　ナ。（なぜなの。）　（神部 2002）

神部（2002）は、この「ナ」の用法に関して、問いかけの意図が明らかであり、「話し手の問尋の意図を穏やかに相手に持ちかける有効な働きを見せている」と述べている。

2.2.　問題のありか

和歌山市方言における疑問詞疑問文に用いられる文末詞「ナ」の分析にあたって、和歌山市方言に関する詳細な研究は少なく、同様の機能をもつと思われる他方言の「ナ」に関する研究も参考にすると、以下のような問題点が考えられる。

・この文末詞「ナ」は、どのような環境に生起するのか

・この文末詞「ナ」は、これまで疑問を表し問いかける機能をもつとされてきたが、先行研究でも触れられていたように、「ナ」がなくても疑問詞の存在により疑問文として成り立つため、疑問詞疑問文においてどのような意味を加えているのか

・この文末詞「ナ」は、他の文末詞とどのように使い分けられているのか

3.　疑問詞疑問文における文末詞「ナ」

3.1.　疑問詞疑問文に用いられる文末詞「ナ」の生起のあり方

疑問詞疑問文における文末詞「ナ」の生起のあり方を整理する。

和歌山市方言において、「ナ」は、以下のようにノダ文の形式をとって準体助詞に後接する。

（13）いつ地元に帰る｛ンナ／*ナ｝。

（14）いつ地元に帰った｛ンナ／*ナ｝。

（15）どこのケーキがおいしい｛ンナ／*ナ｝。

（16）どこのケーキがおいしかった｛ンナ／*ナ｝。

ただ、名詞述語・形容動詞述語の疑問文に関しては、「ナ」が、以下のように、ノダ文の形式をとって準体助詞に後接することも、名詞に直接後接することもできる。

（17）どれが太郎の描いた絵（ナン）ナ。

（18）どの問題が一番簡単（ナン）ナ。

「ナ」は、疑問詞や、疑問詞と格助詞が結びついた句、すなわち統語的に名詞性を有する句にも、以下のように直接後接することができる。

（19）あんな言い方をしたのはどうしてナ。

（20）早く手伝ってと言っていたけど、何をナ。

したがって、疑問詞疑問文において、文末詞「ナ」は、準体助詞を含め、名詞相当の句や節に後接して用いられることがわかる。

ただし、この「ナ」は、間接疑問文に生起することはない。

（21）*誰が今日の打ち合わせに参加するンナわからない。

3.2.　疑問詞疑問文に用いられる文末詞「ナ」の意味・用法

3.2.1.　「ナ」の基本的な意味・用法

疑問詞疑問文に用いられる文末詞「ナ」は、上でも少し述べたように、それがなくても疑問詞の存在により疑問文として成り立つため、疑問文に付け加えられたもので、疑問文を構成する必須の要素ではないと思われる。

（22）何を作っているン｛φ／ナ｝。（何を作っているの？）

このような疑問詞疑問文における「ナ」の意味は、結論を先に述べると、以下のようにまとめられる。

（23）話し手が、自らが判断できない不明な情報に遭遇し、自身の中でもそれに関して思案しながら、その「疑い」の意を表出する。

疑問詞疑問文における「ナ」は、先行研究において、聞き手に対する問いかけ性をもつ対話的機能を中心に注意が向けられていたが、対話的機能だけでなく、聞き手に対する問いかけ性をもたない独話的機能をも有している。

（24）［一人留守番をしているときにインターホンが鳴って］誰ナ。（誰だ？）

加えて、この文末詞「ナ」が問いかけ性をもつ場合においても、常に明確な答えを要求しているわけではないことが、以下の用例から推測される。

（25）A：［友人の太郎の態度について母親に愚痴をこぼして］
どうして太郎っていつもあんなにぼーっとしているンナ。
（どうして太郎っていつもあんなにぼーっとしているんだ？）
B：さあ。でもまあ、本人に聞いてみないとわからないけどね。

（26）A：［家の外で大きい音がして］今の何の音ナ。（今の何の音だ？）
B：さあ、何の音だろうか。

これらの例のように、聞き手が知り得ない、あるいは、聞き手が知っていることが不確実な情報を質問したり、わからないということの同意や疑問文で返答したりできることから、話し手は、必ずしも聞き手に対して明確な答えを要求しているのではなく、聞き手の考えや同意といった、話し手の「疑い」の表出に対する聞き手の何らかの反応を求めているという程度の態度を示している。

したがって、この文末詞「ナ」は、話し手にとって不明な情報についての「疑い」を表出する文において用いられるが、それが対人的に用いられる場合、明確な問いかけ性をもつかもたないかは、聞き手が知り得る情報について尋ねるか知り得ない情報について尋ねるかによる、ということがわかる。

（27）A：どれを取ってほしいンナ。（どれを取ってほしいんだ？）
B：その赤い色のやつ！

この疑問詞疑問文に用いられる文末詞「ナ」が明確な問いかけ性をもつ場合においても、「ナ」を用いた文と、用いていない文では、話し手の問いかけの態度に差がある。

（28）［初めて聞き手に尋ねて］
この荷物、どこに運べばいいンナ。（どこに運べばいいんだ？）

（28’）［何回も聞き手に尋ねたが返事をくれず］

だからこの荷物、どこに運べばいい｛ン／#ンナ｝。（どこに運べばいいの？）

「ナ」を用いない（28’）の疑問文が、聞き手の答えを要求するはっきりとした態度を示しているのに対し、「ナ」を用いた（28）の疑問文は、聞き手に対して答えを要求する態度が和らげられている。「ナ」の用法が「質問」ではなく「疑問」となっていたこと（村内 1953）や、「ナ」が「話し手の問尋の意図を穏やかに相手に持ちかける有効な働き」を見せると述べられていたこと（神部 2002）など、先行研究の指摘は概ね示唆的であったと言えよう。

このことを言い換えると、文末詞「ナ」を用いた疑問文は、自らが判断できない不明な情報に対し話し手なりに思案中であることを表す。話し手が考えることを放棄し、単に聞き手に答えを要求することだけに比重を置いている場面においては「ナ」は用いない。

（29）A：［初対面の人に話しかけて］名前、何て言う｛ン／#ンナ｝。（何て言うの？）
B：［自分の名札を見せて］山本です。
A：［名札を見て推し量りつつ尋ねて］下の名前、何て読むンナ。（何て読むんだ？）ゆうきちゃん？ゆきちゃん？
B：ゆきと読みます。

すなわち、文末詞「ナ」が明確な問いかけ性をもつ場合においても、聞き手の答えを要求するはっきりとした態度とならないのは、「ナ」が、不明な情報に対し話し手が答えを自ら考えようとしていることを表しているからだと言える。

これまで述べてきたことに関連して、平叙文に用いられる標準語の終助詞「な」について言及した鷲（1997）の記述を参照する。鷲（1997）は、「な」が用いられた文の発話内容が話し手に属する事柄ではあるが、聞き手だけでなく話し手も明確に断定できない、あるいは確かに知らないということが典型となっており、「な」が、「記憶情報との照合が未完了、あるいは検索中の発話内容であることを示す標識」である、と考えている。

（30）A：独りでいてあなたは幸せ？　B：幸福でも不幸でもないかな。

（31）（前略）そうそう、ソファーにふたりで並んでアイスクリームを食べたのが最初だったな。（鷲 1997）

和歌山市方言において疑問詞疑問文に用いられる文末詞「ナ」も、平叙文か疑問文かで異なるものの、この標準語の「な」のような性質をもつと考えられよう。

したがって、疑問詞疑問文における文末詞「ナ」は、独話的・対話的な場面に関わらず、話し手が、自らが判断できない不明な情報に遭遇し、自身の中でそれについて考えようとしながら、その「疑い」の意を表出するものである、と言える。

3.2.2.　「ナ」の周辺的な用法

ここでは、前節で考察した基本的な意味・用法に加えて、さらに、話し手の「疑い」の有無と文末のイントネーションといった二つの観点から、疑問詞疑問文に用いられる文末詞「ナ」の用法について述べておく。

これまで、疑問詞疑問文における文末詞「ナ」が、話し手が自身では判断できない不明な情報に対する「疑い」を表出するものであると述べてきたが、例外的に、以下の（32）のように、話し手が答えを知っている、すなわち、「疑い」をもたない情報について敢えて

聞き手に問いかけるような場合に用いられることがある。

（32）［理科の勉強をしていてわからず］

水素と酸素が結合したら何になるンナ。（何になるんだ？）

（33）［理科の先生が生徒に対して尋ねて］

水素と酸素が結合したら何になるンナ。（何になるのか？）

「ナ」は本来「疑い」を表出するものであるにもかかわらず、なぜ（33）のような用例が可能となるのか、同じく「疑い」を表す標準語の「かな」について論じた仁田（1994）を参照する。仁田（1994）は、疑いを表す形式の問いかけ相当化について、「思いもかけぬ問いかけ」と「疑いを装った問いかけ」という二つの類型を両端とする連続の中に存在するとしている。

（34）A：もみじ橋、さかき橋、けやき橋、なんだったかな？

［口に出してつぶやくと、いきなり耳のそばで］

B：柳井橋ですよ。この橋の名前でしょう？（「思いもかけぬ問いかけ」）

（35）［小さい子供に向かって］

僕ちゃん、お腹でも痛いのかな？（「疑いを装った問いかけ」）　（仁田 1994）

この「疑いを装った問いかけ」の「かな」は、話し手が、聞き手が回答可能であるという想定のもと、聞き手に向かって自らの疑念を伝えているため、真の問いかけ文との差が小さくなっているが、ただ、真の問いかけ文と異なり、話し手の判断内容を示す情報呈示性を有しているため、回答要求性が軽減されていると述べられている。すなわち、「疑い」を表す形式を、「問いかけ」を表す際に用いうることが示されている。そのため、標準語の「かな」において、以下の（33’）のような用例が可能となる。

（33’）［理科の先生が生徒に対して］水素と酸素が結合したら何になるのかな？

和歌山市方言における「ナ」についても、この「思いもかけぬ問いかけ」と「疑いを装った問いかけ」の類型が適用できると考えられる。（33）のような例外的に思われる用法が可能となるのは、「かな」と同様に、真の問いかけ文と接近した「疑いを装った問いかけ」がなされ、聞き手の答えを期待しつつ、「知っているのであれば教えてほしい」という、和らげられた要求態度を示して、聞き手が答えを有しているのかどうか問いかけて確かめようとしているからだと言えよう。

また、疑問詞疑問文に用いられる文末詞「ナ」は、文末のイントネーションによって、その表現のニュアンスが異なってくる。上昇調をとる場合には穏やかな表現となり、対人的に用いられると、聞き手に穏やかに問いかけるニュアンスとなる。下降調を用いる場合には、叱責したり呆れの感情を含んだりしたきつい表現となる。

（36）私の壊れたかばんを直してくれたのは誰ナ。（誰だ？）

（37）私のかばんを勝手に使って壊したのは誰ナ。（誰だ？）

普通、（36）の文末が上昇調となり、（37）の文末が下降調となる。この文末詞「ナ」が「ナエ」[5] という複合形をとるときも同様である。

5）加藤（1966）ではこの文末詞「ナ」を用いるのは主に男性であると述べられていたが、現

以下のような問いかけ性をほとんどもたない用例においても、同様のことが言える。

（38）［地震が起こって］何ナ。（何だ？）

（39）お前、親に向かって何ていうことを言うンナ。（何ていうことを言うんだ。）

（40）何ナ、何ナ。（何だ、何だ？）喧嘩か。

話し手の遭遇した眼前の状況に対し、（38）（39）は、下降調をとって驚きや怒りなどの話し手の感情を示し、（40）は、上昇調をとると関心の感情を示すが、下降調をとると呆れの感情を示すことになる。

4.　疑問詞疑問文に用いられる文末詞「ナ」と他の文末詞の比較

和歌山市方言には、文末詞「ナ」以外にも「ケ」[6]や「ラ」など疑問詞疑問文に用いられる文末詞がある。ここでは、「ナ」との使い分けを明らかにしていくため、それらと「ナ」の比較を行う。「ケ」と「ラ」は、疑問詞疑問文以外の文にも用いられるが、本稿では「ナ」と比較するために、疑問詞疑問文に用いられるものに対象を限って見ていくこととする。

4.1.　疑問詞疑問文に用いられる文末詞「ナ」と「ケ」

疑問詞疑問文における「ケ」は、形式面において、「ナ」が名詞相当の句や節にしか後接できなかったのとは異なり、そのような制限なしに疑問詞疑問文に生起する。意味面において、基本的に標準語の「か」や「かい」に相当し、常に対話的な場面において用いられる。

（41）おい、こんな時間にどこに行くンナ。（どこに行くんだ？）

（42）おい、こんな時間にどこに行くンケ。（どこに行くんだい？）

（43）［家族が出かけるのを見て、独り言で］

あいつ、こんな時間にどこに行くン｛ナ／#ケ｝。（どこに行くんだ？）

疑問詞疑問文において、「ナ」は、独話的機能を有し、その意味が「疑い」の表出に留まるのに対し、「ケ」は、聞き手の存在を必要とし、聞き手に対する問いかけの意を表している。

4.2.　疑問詞疑問文に用いられる文末詞「ナ」と「ラ」

疑問詞疑問文に用いられる文末詞「ラ」は、形式面において、「ナ」と異なり、ノダ文の形式をとって疑問詞疑問文に後接することはなく、名詞述語・形容動詞述語の疑問文に生起することもあまりない。意味面において聞き手の意向を尋ねるものであるが、反語表現のようなニュアンスを含むことが多い。

（44）［晩ごはんを作っているのを見て］何を食べるンナ。

（45）［これから晩ごはんを作るにあたって］何を食べるラ。

（46）［テーブルに聞き手の苦手な料理ばかりが並べられているのを見て、何か食べられるものはあるか尋ねて］何を食べるラ。

在の和歌山市方言においてはその使用に関して男女差は感じられない。しかし、この「ナエ」という複合形は主に女性が用いることの多い表現となっている。

6）「ケー」と長音化することも多いが、本稿では「ケ」に統一して表すこととする。

（44）は、聞き手が何を作って食べるのかについての「疑い」を表出し、（45）は、何を食べようか聞き手の意向を求め、（46）は、何も食べられるものはないのではないかという危惧を含意している。このように、「ナ」は、話し手の「疑い」を表出するものであるのに対し、「ラ」は、聞き手の意向を尋ねるだけでなく、そこに加えて話し手の否定的な予想や危惧を含むことが多くなっている。

5. まとめと今後の課題

以上、本稿では、和歌山市方言における疑問詞疑問文に用いられる「ナ」を取り上げ、その意味・用法について記述を行った。まとめると次のようになる。

（a）文末詞「ナ」は、疑問詞疑問文において、準体助詞を含め、名詞相当の句や節に後接する。

（b）文末詞「ナ」は、疑問詞疑問文において、話し手が、自らが判断できない不明な情報に遭遇し、自身の中でもそれに関して思案しながら、その「疑い」の意を表出する文末詞である。

（c）文末詞「ナ」は、疑問詞疑問文において、独話的な場面では問いかけ性をもたないが、対話的な場面では、語用論的な条件によって問いかけ性をもつようになる。

今後の課題としては、和歌山市方言における疑問詞疑問文に用いられる文末詞「ナ」に関して、本稿ではあまりできなかった他の文末詞との比較も含め、見過ごしている点はないか、その妥当性を検討し、「ナ」がもつ意味・用法の分析をさらに深めていく必要がある。加えて、疑問詞疑問文以外に用いられる文末詞「ナ」に関しても詳細な分析が必要である。

【参考文献】

加藤信昭（1966）「高知県安芸郡東洋町甲浦方言の語法」『徳島大学学芸紀要』15，pp.25-48，徳島大学.

神部宏泰（2002）「近畿西部方言におけるナ行音文末詞―その生態と特性―」『ノートルダム清心女子大学紀要日本語・日本文学編』26-1，pp.1-16，ノートルダム清心女子大学.

佐藤虎男（1973）「大阪府方言の研究（2）―泉南郡岬町多奈川方言の文末詞（一）―」『学大国文』16，pp.15-26，大阪学芸大学国語国文学研究室.

仁田義雄（1994）「〈疑い〉を表す形式の問いかけ的使用：「カナ」を中心とした覚書」『現代日本語研究』1，pp.6-14，大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.

宮城文雄（1956）「徳島方言概観」『徳島大学学芸部紀要人文科学』5，pp.39-56，徳島大学.

三宅知宏（1996）「日本語の確認要求的表現の諸相」『日本語教育』89，pp.111-122，日本語教育学会

村内英一（1953）「文末助詞の考察」『和歌山大学学芸学部紀要人文科学』3，pp.48-67，和歌山大学学芸学会.

鷲留美（1997）「終助詞と発話類型―東京語終助詞『わ』と『な』の談話における働き―」『日本語・日本文化研究』7，pp.65-79，大阪外国語大学日本語講座.

やまぐち　かな（大阪大学学部生）